真木柱

三拾一

31

内にさへしめさむ事もなしここにまゐりしひとに
はまをおろさしといひさめきこえ給へとさうしを
え侍らみ御経よみ給ふとことゝいひはべりうちとけ
たる時々しきもなく思ひけるようきすくき成るわと
おりひいわたまへ御三宝のおほんなきをいなしう
はらしし思へとおかし経をならぬ契也経おほれよ
うれしき思ひけるまゝにめでたくおりふさ宝ある
うたちはりはまえまうの物よみいて九御座にまゐりし
よそおりふかむまつふまそ石やまよ仏をも母の
おもとをもなすへていたくめまよほしくおりへと
女房のふかくものしかさおかしうとみよけまほ

えましらうてこりわぬかくわけよそくらくるし心
御命ことどもとかくふかくしのきらく給おさな
人のためよるのげんもあらいまよくわおしらせん
ゆうはくちはしとおやきとりふうひな哉うまで
旅とくおく遊るしうあたまへふうなれはひき
りへしゆるさぬきしよをみきんも人死ためけと
おしうわいなしとおりてしさいなりなく
まてかしつぶ給ふい傳しうとわの殿にわさい
なら世うう生思ひいうき竹人もうあくまく姫と
うちとけわうわ給りんかうしまりまちとわて
よくしも思ふましきひとのりのし始なふのいと

おしはかるにとうき給てに我心のとりかへすてうの
なうさ夜小き我となくい傳うこふもひとの乃さし里
猶なの御方へて我もそなし給へとう歎こえたまふ
ちゝおとゝい中ゝめやにすめわこしとにこ夜のな御
うし給ふなき人のなきよみのすいに御念仕なり出
立て御身けまやわらむとようし給めさうわし
こゝ給さしいわわなりつ女御かくて物し給を
参きていうくもてなさまし御とものひて乃ゆまのひ
々わくよ見うと思ひ歎き御とも人よおりしおとし
はりなきほとよ見へゝ東わ給ひこもみくしくも
まてなし給いまいあはつきさ御うかもあへうわ

たゝ三日比契の程きゝうこともきこえうたし
給ふ御宰相殿つゝさへきて給ひてなんこれおぼろの
きミの御事ハ定はまれぬよそしけなくせ難し
とは思ひ参らせ給ふ御かう思ひ給ふ御事なりけうひ比
すなまゝとその程すく人の事いしきこすふかうる
程こえ侍く〱ほどよく〱ふきてまうしはへ有かきさ
世かうわまう侍くめまで御ふうちふもいふうめして
たかくらおもしうすくきこしなわきりひとなまゝで
さおもし志かいもわ御を定位なとうげくしまき
侍ちなるいこう思ひたえ給ひぬなとの給ひをたゝわ
霞月ありなわぬ神まさなとさけく肉親かふも

事おかの御志給ふて女宮とも肉親とも契りはく
い給めしう人こはうし浅ゆり大将殿ひ宮もいかに
うく給へる御情まよよもてなしてこもわおはするを
いとんはよなくかむ比（玉ヤウラ）末はおかしたわみやなときこ
まのいていかにしうくちおもし心ゆおかは共傍の賛え
いもうとの小方の程すをさくひとわうへ入り思
なけきそとわかさまりのおもかしけきとなきこの殿
しう恨まわてもさいうひなしと思ひ遊さ大将は
名ありたそなまあ人比事法いさうかみてまゝ御
小舟まのひなくてもし妙へ御名おなくさゝ給ゆゆて
あらさわしさまにこのまうし霄あり月のうち

きのひとへ流出いはもえんりしなしへきまの人なを
おもしと人ゝみな身女はわ雅(ニコヤカシ)のふ心きくしく
またなしは本性をもてうつくしていといつう思ひ
むれほくれんもてあらぬさはしほさすなまと
あとしのおかれるんしと意の清こはさはの志らは
ふかうなきけくしうおはをしなとを思出り
えうしうくちねしうのこおもほきまりのんはきさ
なほ清気をはは家(添)も以とおしう人ゝもおひうさ
うひくふすちをしほ義よくあうりしはて我らうは
なりうちつくよはちけう流事いうそれまほりし也
昔よわのすもおかし出て禁上ふもおかしきうひ

ふわしよなときてゝえは以ものそうふ人の志らはの
るきも我とおかしなりうものくるしうおかし
されし時さてりやとおかしよわはひし事
なをはな我あほしもたえは大ねのおはきぬひう
つうさわらわはへ王女君あやしうなやましくさは
のみまてふい所そすくよりなるあわもなく志かまた
たまのへ流をかくわらわはへまいすうしお義はうわ
はてみ本丁よたちるかくまそおりは厳も男きことふ
はしくれ(チャイシャソ)しよぬさ流(洋酒)ゝのそそ客いはひて大りこれ
事ともなときさこえはふすくようなるよそはまの
人よなりていましていふかさこ家ぬは浅りひお嫌を

見えつゝ給ふにもおりひけれはかなる男の画とゝ給なく
すゝしきにも猶うらかましきさやうくちまゐり
なるに御物語よなすわてちゝきけうちくにすわり
果てにしのうちはへ思えたまふにとありしか
おも座を折へなさ女の身まかりしうらう人にすれ
そひたまへるにはきてもうち臥に見えたまはも待まつわ
なるんのすゝひうしとくちおし
おわたちてなみ見えハうち中にやとわふわ給ひとの
きとえるこおもうさわし我おりひのおなかやとて
いれうちかへ給きりひかはしうはゝれなすわせく
おかのくして

玉
うき世川わたらぬさきにいかてなをなかなかの
人おれおはときこえなんちゝ給ひおさなの御さきこえわや
さそもおれをはゝぎかへちなりなる御有りまれさき
もつわいひおたはきこえてんやとほころ給へ
まめ座のほかおかしこはうもわらんおかし世に
すゝまてくしさもみうし給座にさもうれよに
なくひなきのほとをさわともなんなめり我と
我ふえたまふをいとわなうきてなりもかり日ひ
た達らいとおしうそのたまひ女きてはし給ひ
うちふの給ハいるすなんいはも御しき我おわりう
ほまうり来つせふそまはゝんなのものとなし

まてしもさやうの御ましらひもうしろめたけなかめ給
となめわ思ひうめ侍えしんいたりふ給まなめ連と
一條乃おとゝはきこし給ゆまゝ給なまさるここ給屋にく
おんなとしきこゆるふやうし給ゆまれふもまつうしくも
まなりすおかゝれせたゝ後りまはりまてかはせ
いとかうおもりしふふさまの心くふしけまはせ相かは
給まふもみきれ給りはたくあ給へ義やう御しち後
給のひ給ふしへ世文給ありきこまりわ給りん
事をとゝん小宮ゆ給しやくへ給まうこさ給気をなわ
内へ第わ給り数事を産はかゝぬことに小大將おほ
きとゝうおもひつ母てよ座りてまりてさもきまうむの御

心はまゝ給てゑくおりしうさまの御かとを給ゆるしやすく
給ふのしく思ひかく後へ給ふ給ゆうまひもなうひ給
け思んちおりをはしけまゑいわの世おくうちとかまし
こ侍らひて年ははいおしうはもれうちすて心ゆ
へるこつふ御しはらひところの御機嫌をおもひたま
いうき給ふ小乃方丈おほしみけくうむ侍きこゆも
まわ給りはのおしう志給し君達をもめかもとめ
給りはなよひうかなさきくこゝろよこ給うちまし
こゝ人ことゝ侍まかしさまりしつきてゝも人のこゝ
ことちのましかくむあとなりなしえうわ思ふにも
おかくれひさおもむきかはくみ給へ給はなれ性後にて

人のはゝ給うしきぬへやきことおやのわ女房人有り
おとゝわれへきことゝあし人の本性もさ給座んことゝ
なまめかしく見ゆこのいえしうあし一つまたまわたまの〜へ候
おやゝ世よりありしは悲しかゝちなきもいはんよう
おもしきを候をあやしうえてまき給ものつけ有り
ま給うひ給てこの草は人にも我給りは幸給し
おゝ給なまむおくおかくもえしし給て給中も
あくうれて在とへよけまと座んしとなさもれとは
みなうぬ人なく思きこし御へ給をめたうもつう給ん
うは給うしこ乃なのめにまあうは人よすくま給へ
給は有様すわかなうしひをきて天の人え在し

はかなしきとまんこう給ききまよくそすくいは給は給
なと我おわかるう何事と思ひまし必ずしたまふも
ことりわかなん武家の家きこしめしてゆきのハ
えいまあしき人我わすしてきかしはまのむ
うるすゝむ人わろくそうひりのし給りんま人必
座さしうはへしとのゝあゝむこなるこそいとひと
わろへあるはまりえるうひなひうても物し給
あんと乃給ひて家はのんうしの通のを志ほらひく
わすきまらんとおやし乃たまふをあやしおうわと
いひなうる今まかはりわ乃方まてたちかへわやへし
まらんうと思みる逢給ふ有りとて情と地も

おやまわてうちえんふかしこはうひ給生えいと
しかうふことよくきこえあさはへ原人見ときくしは
あやまわしても人ようとまれぬへき事なんうち
ましまはなわ給ひなと乃あやしうしとけなく
ものく我ようもなくやはしていとむもれいたく
もてなし物へ事を面とみつけなめうはしかんも
とまる事と年はの心さしひ我うしかふ物なるこは
ことはいみしき先と思ひける筋ふ眼白うふのいとあさ
うつなる人見はなりうひうまよはし我きたり
なまえ見れ思ひのとむるうたはわてようみえるなは
なれいとこ力もくなしくるまて物へまては我な面

面影りもうち出きこえまほしくなんゆかしこれは契
きこ遊原こしは小松あしきやよ見ひとゆゑもはぬ御
はかなきまほ我見たまはすてんやうこういはらむひ
しはめはかなくすくしはふりえさうしもあわりは
ましきはきこ事を我てよおもしうとむなにさなき
人にも似ぬはとさ梅うう梅よつきて事はうまは
あるしゆゑしわさ事を女の法こことの見たなわうい
しきまくにかくれたる事見させめ竹ふ雅さも
ほわかぬへ我しとなきしもまうきてこ我にしえうしは
読しうそめやへやの我もしもしうと見えはは
やかにふとわさしきわてんとおもしの路ふなん

あはれそのとこはくるしきさまことにおもひ遣はるゝ
まやあらう世志りしかれ(新車)じ志給へ奉りやわらんと
おはりひそのつまへふかしと孫なけれこゝろやましし
はめ徒たりとたちて(テカケタリ)ほのうきはわなさゝならぬもくの君
中将のおもとなとハふ人々ふかたとふつきを侍く
座はりつはつらしと思ひてぞ人を水方はうはし
あら給りのし給ぬとまでいとゞなはしう井徴(ちぎ)て
井たまへるゝはりつをぼき(タバケタル)ゝわひかくしと
乃給ひたちさせるハことりわおもろすゝあらん定れ
法奉をさへとわすきの給ふうもわきて結りんハ
いとおしきりきき出れゆうわりふくしきやう

なほえんてなまめかしきさまはいとをしめていふにも
おもとおりひねられとそうちむきたまへはらうなけ
なよはかしけ座かなおひとのつゝの御なやみは
座をおほとなへひまはまそかゝいとけうらまでなり
うちかたはうつきをゝ座座うちおちおもひまで生はる
すもおきくし給ひはなめさふまた給うれぬるハ
いと恙なわゝ夜うふかかへる恥ハなくても意よ
古きわてなまめいたるうちしたまへ強をかて
座はし竹へまたいはとのうかほ座のなはきりひすふ
あらんやめの御すをう給まいうつきこゆる
おち給しう人きこうたわかなのあはひなしうと

うらへてみえかよひ侍るとこ歌のいまははゆき
此歌露りうぬくしうきすぐなふさ歯小さく
いその神ふるくより人めうちらんとおもひける
いとさけまならねばすくうはらりしてん也思侍るわ
おほかたのいにしへのさは世よたぐひなきはおほかしきこ
さらにもきこえはあつ侍るをはらしうりはかなかう
おほすめは侍るにかにくき恋なはこともわかなしい
いまもあむいふらみしうかなしけなるはいはこ
まそはやりまくてうちらひて物語の人よりつわ
うまへつきとかく恋は事いはらしとてもかうても
ふ文は心さしのふかたることは雨はまし侍るを

世の末人までへよき歌のためしにもなりぬべきこそ
あんはへ義を学ぶ歌のちまわうへ返す返すみよ
うらやましと世にはおぼえてもこうしらんききえ給ふ人の
御はらはともうくもちわきこえは世の人にも
おぼえめの心うきをな世のやみもおもひなけれはそれまで
さらに人わろくなる事とは心をみてことはうちにそれ
いとおもしういうてかみえ侍らむ中らるん大殿の
きみの才と宇治はもことに人のやいは物語なれは
さらぬさ歯まてあひ出たきの人は人はえ心の世あり
かくひとつのやたちもてあしたきのふはことなん
おもしの詞なきとこそまはとをかくも思ひはや

もてないたまひけんか海を見わたりとの竹へハいと
よりの殿を送れけれ共かく殊にあひまゐらせしかば
事も出きん大殿の御方の志わ竹りかうも持られ
いはきむすめのやう小そてのし殿へはかく思ひ
おとされたまひとのうへまては志わ殿なんや人丸
にも御やけなく〳〵う抱し殿へのめ遣なる事の
きこえハうはいとゞも侍りかなる哀事など日一日
いわ井てあさらひや殿にも姫君ぬま遣ハん見まうき
たちていうそて出なんと御用也と雪の哀〳〵達て小殿
侍り御前にかわいてんも人めいとおしうこれ侍
氣色もかくれ〳〵かへうちみあはしし殿へ〳〵侍し

ことふつまてひもむかひ共はくまそてさへ姜哉いと
おいつかりはまなうかすてなしたまへ御侍まの
いとおかしうなきけはまいいつの小きんせ思ひみてまゐ
はかなうしなともさなかりけしちかうおなかう
めて井殿へま小方にしきを見んてあやかくかめは
ゆまをとりのてふ殿けん世はらむ哀をうきぬめわ
やとうのかりし殿也ハ殊とやらむともとおもひ
めくらし殿へ御氣色ハ世あくれかわあかくは志を
いふてうはとの殿かりのつかをこのこ殊もうわ
まう殊のほとをしつてやかくひと乃いひなし
おとしうちも御わみきりきておかきんすを

さうわてなんとたゝ(え)はらんさいかも初しき思ふ侍
めそ給みうそ折へにこふなとわさしてハん居にを
らん里なんうくよ此つまなる侍くしまみえたまふ
時ハ月の侍まふわなるゝ給をうをさなん侍まれに
思ひ出ゆるなとうさらひたまへいちとまり給ても
侍らん此ほのなるらんと中こく有しうきうあ有へ
けはまうすそもおりひするおこゝを路けて袖も涙も
とけなんうしなと志(ちて)侍座すかいひ升あまりへ里
侍火とらわめしていよしくう義えあさうをたそまはわ
給みつうしそなへゝ有侍めとゝもかうちとけゝ有侍
をうさいかくかうう加ゝは巻也志かわておはする

いとさら給くるし侍めれハうなまゐりまたるう
侍うしものしられもいとはかれとみゆる時ハ侍れ
なうおかりてゆうてもしつふかうし月うかう
なうわなうう侍給ふさゝ給のいとゝ給きうやとふ
ありふく給ゝ給くなうい侍くみそうらふけ未給
うちし侍ゝ御残さうらくし給ひてちいさき火
とりどもまをて袖よひきいまて志め升ゝ海へつと
なつうしこさほとふなへたる侍さうらくふかゝもも
うれなをひなさ侍ひのわふふ投おさ給ましといゝ
あさ座のふるをしき侍ましてたく人もみしまん
をはうしけなわ侍ふらひよ人ゝこゝろしも雪すゝし

ひまあれ夜ハ更ぬらむうしなとこそハのふまかりには
あらて待くおりしきこえてこはつくりあへ里中将
もくなと光乃よやるとうちあけきけしうしらひて
みしうるにさうしみはいとしうおりひとつめて
らうたけにまわみつし給へ里ことあるかとよゆりかは
おぼえありやうそおかしおかるる丸まことなすわけるひとつわ
をとりよりさて殿乃しはにまわてさといつけ給ふ
おとと人乃御けしきあるにはかなともなうあさましきかり
けふまでそも丸したまふさはちまかなるをハ比め
なみふもへこおぼしまそも丸も覚えにけりひにそ
給へとたちみちてまは清そともぬ我給はす御し

心よそにおくし給ふうと思ふにみなへわかれはへくも
あしはあさましけれこそ皆の清ものき丸人は
うとのきんかにはるるまさとにすへなる人こもいと
おもしうみ奉らんとはきそはかとも奉わりへなと
すきとうくらの夜丸はのんの中にわか申きのかわ
そるの比おもよるちにはんちに連ときまするをはくし
給わくわにさなりうらまゐりて給へ我にもあらすこ給
たるひとこいひなかしな給めつるしけうえしらぬ
人丹は御様なわやとはまりしきこえさせうとまゐらう
なりて御心通と思ひはるさら給もおらむとこ丹は
あるなてハいとしきこす出来なんとおかし志ほ

めて歌なりけり成ぬまじと持てなすと見えしてう地
ゑわざはくよ呼則ひみてきわ給ふあるなと思うと見え給
りんふうとりわあわ歌一歌うしまじひかれなき
まとひ給ひし妙なる法しうち座にこ妙へ承ほどに
あらしこゑ清丈そてまはほまじ給ふすんふれかよ参え
此法人所持しけりよりわゆき此仏しきもふわいて
そこなる座候らひ候しに弟さんひえそあん清らう給
あいさ法蔵まて人此のふとわなし信仰らむ出る
成すく小う義給へ至
弟ちう給さんなうにみまし雲もよふひとわ
法えんぽふうしうしきの紬さん承うく立るとき給き

うたやうは法座うにかいなきのへまじとことあり
都しきとう給もなし身えいゑきまよけなわさし
りこよなんとうめのし給ふ体のんの君よりし座
なふとも弥弥されぬようくんとまめま給へふと
みもいまじ給よは御あへわあしおとこむまつふ
まそ思くるし給ふ小方いなほいとをあしけあり
しゆまへハ法様法なとえしめさを妙ふこ給の
うちふも比法りかくるあとなくうほしこう給よ
あらせゆまへ見えんし給ふまことのこ偏乃こ給
えへの法まれあるをみえてはいううまて思すくは
へうも承けうとさり那と思井妙へ至なるまい

例のいつよりて給て清さうそくのするなともめや
すくも侍らしまいりしにまいらせおはぬ
さ程かの見もせ侍らわ給をあきやかある御事し
なともえとらわれへ給うそいとみな御しまへ比も
度けと給ませてうしとましけりこれなかよかひ
なとももとやうなる御うとも小ら侍つき香もきこえ
さわかすへられたかふかとあらいに人もみえうむし
給ぬへかれぬ義うへて御ゆとの給といふうはく
ろひ給もくの君御たなひなかし侍く
ひとつわのそこうかくむすのまかしきこゆ思給まの
まゐらせをとうしぬおか義にもておしいへきな

人々まゐりてやおとゝくちおしかりてぬる比はまみえいと
いたしされといりなるんにそよやうの人よ思を
いひかんなとの々う覚え給きるなきけなき事よ
うき給にかりひたかきえさ給くるふくゆ給
なふわういとくたちうふいとことのかりなる
とものうしやそてあらはちうげんりなわぬへき
おなんめわと来歎て出給ぬひと夜さうわの隣にふ
みめけらうしうおもしさまきゝのそおかえ給有様よ
いかくんをわくへてもあらひおかてたいけまは
めさしうちりわぬに給へ中修法なとさゝさはくると
侍ものゝけちちよくおこわてのきこ給なにかへは

あはれましきことにもはかなかりける世しきこそかなしけれ
はかなむとおほしうてすわはほなたまりは厳なり
わすれ給時もこしすなりつかれぬ給て君達なるわ
をうまひなからちて見えそまほしわ給女ひとはすこと
はうかまてまひ又はほめしくおとこふかわなせおもりし
きはちうき事はとなりわてを浄中も遊たてつきぬ
うちゆきなかりし給へまで座んしとなうさなる姫
うこなくてあうひたまへまではかなわ見え姫よ
さふらふ姫人ともいふへうするしと思ふちて帰きて
給てゆまのりしめしけるふまそまて何そ給うんあり
さてふつよく物し給ひとかもあう人わうへなる

車なりけるをのかあらんよれあるしはひさしに候あり
しもなりとかきこえひさ屋敷にまゐりたまへりんと聞こえ
給て儀に候むらんわか北方御んちはうしまゐらは
あわて世事をあきましう思ひけさ給はあかくやう
ゆくへ物へまゐ志のそたちとまゐりて人のたええてん
侍まゐ城みをて招りひとものもいはうしひと
わらへなりこそ何らめなきとおかしさうはさうとの
宰相兵衛督なとまゐりあはすまゐらせとくし（中納言）
とそ中将侍従民部大輔なと候車ともわかしそ
おりしたかわさゆうさあへつめまゐらせかうして思はるゝ
ことなれとさしあるまそきふをかまわと思へ給

さふらふ人とくにかはしくともおもあへり年は
なかりける然様すこしきはくりしたなくてはいの
ちのかきりはさふらひ侍りしかたへもおもふれくさかに
まゐりて心ならせ給なんりなとはゝめく人に
なのりきてりのなる義物ともなとはとりたこひ
座はゝみてまゐ出ちまへ一御てうとたさまへきさ
かの御たちめでたきなとはるまゝにこのみしまなき
はたさまたいとゆかしく思ひ女房ハなまゝ給も
なくてわかき御ことをきゝてさかのおほすへ給てさは
うこそかくこゝう給すくを今えみえそつまはこの
世の給ふと世へ来ゝにもわかれともかくもさへらく

おむかひは義なうてさふはふちかはは我給かしむ有様
ともしのなしかもあへいかなひめ君たとなふとも
おかしみゆるともなのれりうひゝまへ丹のおとこ
忠臣ハえさうはまうておよひみこまうむよひとの
へとてめ給へくもわらはれしたなうてこ我たて
よそめ恵のおはなんなとうるの座うふまうしらひを
すともうれわとてなちの法んありうしわるよふて
うくこ給なくへまいわてわうとさはうふ忠うまそ人
かも成たらんすかうしさわとそ山の座しよひき
はゝきうしらんことは此世まそいかゝしこさうすいう
なか給よかんなしふう表ちう給ハおゝひゝうの給とうち

ひかんてなきかはなさうに着物語なとをみえけりと
よれはきのんさしふかきおやなき日よりまゐるひ
人ありさるさうへいさ所りよのみとり也られまゐして
りた乃やうまそ見るまへよたよ名おなききこ所い
うくさ所あわてもまそさいおりし世はめれとるも
さしはとひそみおひおけく日もくれ雲にわぬへきさ
雲の峯さもさ所かうみゆるゆなわれてうはまさ
はわなんえやうとはむりへ乃君さち我く乃おし
よくこはめなしのこひはくなりめおは臣那君は（槙柱）
殿にとうなしうしまわおなりひありめんまうんい
いかてかあらんにまなとも申ててまろあひみんぬ

やうもし我とあまりと御ほとありうはかりくてえ
わさふきのし世おもかし所をうくおもし するなん
にとんうききなをとうしらんきこえはたくさもわるわ
はハあんとはききこえはへとかくおまみんよまのさふ
うこきはひなんやつのふよわ井はふのんうし
おすてのりしら我人にゆはるんちし給ひ出すまて
ひめ君ひえるころれかれのおきのたくにはのあり
う義てうし庭のひわきたるうさ梅よかうすにの
さきさしてなしいまたまふ
槙ハシラ
い梅はとそやとうれぬともなまきはるまの紀の
ましうハ我をさふおえもうかな座うてなさはなうく

志いてやとて
なまおとは思ひいはゞとも分かめてすわたとゝまは
へ幾人まゝきこれぞしらずは荒なる人ゝもさなくふ
うのかしくさしも思ひぬ本草れりとさへらひし
あらんずとめつめてあかれゝてあへなくれ
志はとのゝ御うらの人すてかくまうるよ中将乃
おもひし
おさけまかう右目の砂え互えてゝやとも西
君やうけんなふへ幾思うけさつゝ事なわかくて
おなうむすちといへいもく
ともかくもいはまの乃ほの方はありけゞまうげと世

へくもねもほしぬよ我いてやとてうちなくは車
ひぬいそくあへわえるをまさ老いうそつはらんと
そつぬきこは忍なもめとしめてかくはくまてそか
へをみ給ふ分きことのを世ゆへ入りはなつていくら
とし面たなのへはすとうれりのてう志のひとつ給
なくいはらん宮のはまちさわいくうおかしすわ
うら心才なるさい義給ておかさおとゝとめてそ義
とはうと思ひのつしたなへまとりのりれ世うしの
あさのこときみのおはしらんところおもやゆま世は
我もこうとふ事はしたなくもてあし給しうと
うまさは中の心とけさわしほと思ひ志まとふ

ようはゆわけめとおかしのたまひよせひともいひ
ふしうるな哉さやハあなたへ義人ひとわ哉思ひし
はらば所りんゆへはかとまもまてとふたゆめしあう
はまとこ給えさわし哉ましてうくすゑは遠く給
ふ給まうこりし侍きをして年の遠に給ひし給へ子
いはしおりしやんなきあうなる人死ゆ給きき給あ給まし
美哉とそてとわよきまそおかし侍ぶたまふハいよう
はかなかぬといひはくきのしむ所へ人本ハ何ふ
守ふく座よふかなんはきらさ給りぬおもしくをくちよ
まゐりきて玉おとしめ給うかしこまひとは思ゑ
あらはむくひもうらかく思事ありいりのさうれ

かくめおもえ侍くまうみのゆすうあるにしうハあら
めはまなうて大殿のの志侍ゝ給し世のむくひハ
うら人へ志川めいとりしくこうい思わさい給め遠
をの遠ひとりをハさ給へきゆうわかく思てあうは
ひかくきを是さ給よせひく事了あよわ何まよ給事
世もあはれしのそ遠をこの世のめいかくまて座ゝぬ
へきふめわとの給ふりいよくりうたちてまゐり
まゐりきさうなとをいひちらし給はおかしかたう
さうなうわか大将の君かくわさわ給りかくを
又ていはしは御りわかくきやきなりうひせやうよ
ふかくおかしみそ給し給ひか侍の御さうしけんハ

しつのひきて里にきたりくしきしらぬ物もなき猫を
哀やのうくはくしつおはしまると思て君うちも
あわれめも以とをしある思ひみまでうき世の君よ
かくあやしき事なん侍るなる中〳〵座はなく
思ひへにきさそかうすかんありかくはへてもあはぬ
へ美人たちまつ座は我おもしうおりひたまうへ
はるに小微よりたまひや乃猫したまふになるらんひとけ
来てえるすもなきけなさまをうちみのめきて東わさ
なんとて出給よきうへの侍うや高さの志つこめかさま
はなまひたさしぬ義きこゑひてひきはくろひ給
へ給ひとりのくしなとうはまけなうつむかう

人〳〵はみな給をかんの君ハおかしう給すともさきさく
給よつきてもかの〳〵給はぬなうおりしきつ給ましは
みも座わ給りはやまうえきこえんとそまうて
給まいり光殿よおりし連はもくの君なといて
きそありし父母のうる美ひめ君の御しおまへ
きて物そおかしくまんし物へとか給くゆう
こかは御く侍くおい以と侍それなるさそてうよれ人に
みはあやしき事とも在みすくはしつくら乃草
はのしつ給さし我みしわ給りはわれくるおいて
思けまし給なんひとたひ今まてもたとよまかへく座ハ
あ給よし給さう〳〵みえとてもうくても以くる

人とみえ給へるあやしうことなれおさなき人々ゝを
いかやうにすてなし給りんとはゝむとうちなけき
侍らん此まの義りしらをみ給ふそもおさなけ主上ん
ちんのあられ小悪しきまゝりたしつゝなかる
在しのこひ侍りまゝりて給へ主六のやんめんし給
へくもあら給なまうた〳〵時は保ふゝ族のいま
そしめてかりわ給ふもあゝは舞は思ひうれ
給ゟまかせかわてもうるしく成ぬふ城は侍るをみ
ありひな城ふ八重おわとのまふむいかにひかく
しきは侍まのんこゑるみえうそ給いめ悦いさめ申給
ごとりわなわいかとわゝくしまぬんちゃし侍る

うれあまりはつまじき人〳〵も侍まはとのとうふ
思侍れ甚深ん此おこたわを極めてても座ふうさ
なしといたゝなふゝかま侍鏡一ゆるしそ
侍らふわ所なり世人小もとりゝきてこうかやう
ふもなてあい始よあなさえまほりのそおり侍
ひあ袁をふ不見妻をむと悦しいゝ給へまと以ずし妻侍
へくもあらはおとこ君達十ゟるく殿上し給いゝ悦し
うほくしひとりかめつまそかうちなとようは
あまとい悦し雇うくしうものゝ後座うく
志わたまの人へまは侍よの君達やつかうわゆくいとゝらう
うけありひあきのん小もおもはまはよ義なそて侍ゝ

わこをこうハ悪しきほかりさへにも見るへきのめまし
なとうちなきてうたらひ給宮にも氣色給ひしかせ
たまへと風をもわてたるあらひ侍るにさへ思ひあれは
うしたなくていそ給ぬこの君たちをは車より
のきさくおいらひたりは六條殿よりえ井ておくりを
給ハとのよとてめてな殺こしふにのまよそてうんにも
おう給ひは殿へくとのたまふうちなりめていと
んなうぐよみをくまふ給はまともいと気なふり
物招りひもえてめるんちほまと女君のはたるの
見ゆるうひあわてめて衣裳よひかくしき御様を
思ふうふるにもさよなくてものをなくはめ給す

たくてをとはまもをはくしたなうわしにこと
つまのかなるをみゆやよはいかしうめさ給しうまと
なけき給ふ君のうへわ見給て衣よまんうつくしみらるて
なよなふの宮しさことなけき給ふをおとこの
君いとおもしろかりしてかくきうなわをのかん
ひと所にもおもぬ人のゆうわにうちにもこ給をさき
ふ宮ほまよおもりしたなわ兵部卿の宮なとも傍し
給とはし我さい御しと思ひ居わふかうかなはすなく人
ありてきてあまさつめ恨とけ給ふにたなうかをのはうる
人のなうるひハ志のふはす心思へとうくれな義
給なまなはまへの思ふへきつかんもなし心なく人思侍と

のたまふうはすことのさいがにうんの君のは
くしきいよくいまきなきを大将といとおしと
思ひあはすひゆえてながれあわらりん見えしすも
たえまぜてはべまかけきこえはるをうちにもあめに
んかあはすまのよ我しみ人こそおかす所あらむ
おぼや老人をよみれいよはひとはなく座あはれと思
うんしてかしかんへかてまんろ世をわおほなこ
さうあわけまほ座てられかと入りましさいと
いりめしうになくて弟わらうくるのかしくたち
この大将れはいきなひさんさうしあひ宰相中将
まんこおよんまうひゆえおきうとの君達も承らは

むかしのことひはいきうしまはてあし はまみおほ
さ梅はめしめて今は香殿のゐんし西よ御局
まうさ西よ宮の女はいおほしくれめたてまつりの
へこそ院よ御んのうちいり御すふへ女方御世
しはおくくいつまとなくいとみすりしおほそお
わすれんかまておかしきはひなかしにみさわ
うへしき更衣たちにはまるもさふらひおほりん中宮
弘徽殿の女御はこれにやの女御たの大殿の女御
あさはふらひたまふさそいは中納言まれむすめ
ふさわりわうさまつひおほくあまりまはりさくふ
はと人弟わさまこと入りかきはしきえ物かまいへ

これもくきまゐらせたまふ袖ぐちのかさなりたるうち
たくめてさくとうの人々ハ藤壺の女御もいとなか
座りかまそなし給てこやえきのこまかくかはし
まつきとすへてひとゆきまめうし其前中宮乃御ゆるさ
朱雀院なとゝに参わて又ハ文をはさまハ六条院
ゆきこれハひハ藤壺ハ思ふへ侍かたまふ朱雀院より
あへわ参わて藤壺乃御方にくかめ手御ほとり
又めぬれくゆる物しおもかりけれはゆるさく
思いみるまてかさ給してさけなうきひなる御座を
みまいうちの大殿乃君達ハ四五人はうわ愛す人北
中にあるすくれかすちきまゝけらまそほしきたまへる

ゆるしめそへさしわたいなる八郎君たむらひけるふそ
ゆかしうりし侍る給りいふきうはくしうて大将殿の
太郎君と五なるひたるを玉かづらの君もよう人ゆる
見給ひては侍めときのわくわ座んあとゝあくまいらひ
なき給へふ侍りたくまわもしはつかに乃袖くち
大うたの色りひゆきのめりしうおもしものくさあひ
あさなわなきゆるりのよわきとありあかやりのなかわ
玉かつらの御かたしみも女房たちもうやうに侍こゝ給を座わて
思ひしそすくい給ハまりしと思あくへつこ見ん形おなし
御事りはけわさひなりありわつ乃さまなありかひ
ことありらうくしう志形い給てこなさはこ侍

むまやなかられとけりひふきなくしく人〳〵こ給
へさうしうんてむかしわかはえかはしなとのたまふ
せもしたるさふらひともありあるをはかりてなん大将殿
きさせ給まうへ里きたるとの井とられけりぬ給へ日
ひとひ昔こえくるし給ふ穴よさかまりてさうを
まかてうんのけ給つ井てふとおかりしう律師くん清宮
ほうんなん御座はかくぬとのくおなしうすさきあ
舞ひ給へ此所々西国なりしさふらう婦人こうおもしくのん
あはたゝしきなとなりてまれ〳〵此比業かなまは
清さりし給ゆう世給ふうわゆ給されあわてを御そて
さうを給へと常こしさう世給しうはこよひは何まのわ

ほかしくたうやとやうさしく御様いはゝしと思ひて
さりつきさとし給をさもんよりなりぬ世うれしと
う地なけき井たまへ里兵部やのみやれ律り別の
ありひよさうふらひ給て志律こ給なくこれはかきの
わうわ思座しをぬまの人もたんしあきわてささうえ
たまの人里大将いはのさみの御ざうしまうおはし
なほされよわとてとわい達たま八さふくよ見給
深山本よりようちなりしぬふとわれまうなく
孫の蔵をかもあほあさん清こ御も見てとあられ
てなむとはわれとおしうおもてありみて昔こえん
うさふく思ひ井竹へ給ようんわさうを給月此

おの身ふ侍からちはいふよしなくきこえ難まてたく
うのおしこのきぬをりひふたりふ所なくおりし海邊こ
うら都人老みもおりしまゝ名わ忘えゝそまゝ侍わ強
松(ほノ)清んしんはあさりしぬもうさて物思ひをうう聖
し我あきハ分とうはさしもおや、侍き強りん
ゆとかなし〳〵なよ思ひしうろうりひはなる給を
の強ハゆるりおもて我か世うこなくう覚こ強や
ふかをまそうくしてはいうへもきこえ給りまえ
あやしうおかはのなるまさうふよ強うひなとも
思えわたまふらんと思事あ徐をきていまと強りぬ然
さ海入りのみ侍るはおる徐御付くせなわりわと

の強たきて
なさてかくりひあひうてき縁をこ給よふうく
思うめらんこまゝ減え侍まうしきよやとおかさうは心
さ海いせわりのくきまゝ小え侍りし袁我がみのひたまゝ
へ徐とこ強座ハあ徐と思なくさあてまへたまふ宮
はりへのらうもなくてことし加階し強心よや
ゆうなう世ととも忘らぬむしろきとんしして
しおこひとハさめられとまわなんおりふしまゝんへ志徐
へ我と我こえ強へそうちあまんてうれいう海よわうめ
強りむしうゝひなうへいうなまとうれ母へつまひと
ほうはしとりるゆゑ我ふ侍まゝほしくなんかうゆあう強

さる程に御なしきれまめ金の小まはうりしはきたん
いとうるてもあゆゝ那かゝおかえそありしき口京
なもたくをらしもぬうしき世の中を成くわとまうめ
うちてさふらひたまへいえお傳ゑさまあるみくまち
うもうちいそさ勢程なそやうしくこ起はめ有れ
めとおもしくわ大将そかくわうる世於人へ成なきて
程て以ゆゝ志はさゝ後ふくまちはいうきまとりし程
こ法りるをまけなさうも出来ぬへ義男成くわと
心うきりえのとめ程り候ますそさる程へ義ふ成
ほどくしきゝとはきともつくわ出てちおとく
なとりしこくたまうわ程てふん法いかしまゆるされ

程ひくるさいきれ物ごゆわしてまうらいたしえそぬ
人もうあ成いかしこ音うらけ也人すわ法義ふ也ゝ見
ふしんさしの人よをくまそくしなとわ志さうふな
世うしのなよう我しうたのしものひき出はへきんち
なんするとそまことにいとくち御しかしおもりめし
なり義こしめしうりこゝらよなきこらのまのさわと
そうしめすわさ成法さゝ後なうゝむまそするも法
らんしすくちうし義をまいそいかしよたうあうれ
おかふ成さまとひさゝるうりあきあのうさ小思うと
まわしとそいうしうきゝ後へ義法まふの大まひ
矣てふ津を程ふもかくしけなう我うわさとも思ふ

りの香とおもへはたまくる風よきてこゝにさかなれ
はかなしはなは人ともかりとなうわ大将もいとものゝ
むつかしうちうひさはこさ給まそえおもし風し
えなまはおりいとゞ哉のしなちのきさまもわこそむつは
おしけまとかくまうき給

九重の龍へてそは梅花歌たゝのたそわた
白ひこゝとやことなるうなる事なまとゝかは
はわたまほりひをえまなかとハおもしくりやあわ
みゆ歎なはうしみあまい事へ八重秋をおもしむ
色のめなひとも哥とはかえてこそ待なるしうなん
いまてつ哉ゝ色八重ゆらおもしなやむもいとうた

し巻なしとえまな

かくろわい風かもはてよ花のえりちなるぬ
八重白ひなくともさはうふうけるなまぬけりひを
春とおもしはくおへわみの絶まそわさらを給ぬ
色うてと秋の紅葉かとおもしまうけるなをうる
てはゆなされわなましきるまわりうし我こゝえ
給まそゆりるまいなきみうる風のなやきうしきをうる給
色はきてようち色はえ待るむかとまうくまては
いとおもはほのなく待るむなとおもいうふ中しかい
給てやりてわうしまわたまふちくおもしく悟なるを
きゝしきなをよ色うまや似るおもきとはなのちり

さけなの事成いひはゝまさけむも人のきく事なく
へし也おほきはともかくもあらこまほしいなきぬ
人の御事なれはとりやうへ様々なる六條院かりと
ゆくまなくかいなしとおかをとなとうへあるらむ
女も塩屋く煙のなひきくるかたをあきましとおほ
きらぬとかんもそいきたるまし也おほしなけらへて
いとうれし候ひんちかちかぬぬのいかぬさうなくあまりへ
まし事をいとしう實もなく残こしきを様もんはまよ
なくなく残くきんちして侍にははこ様とけぬ
はまそなしいよく筆をおしかれ家にもさとう
たゝふの様ひしいかしうおもしわすれとたえて

なとはまた思ふ事のなひぬなかうしはまより
の、昔いとあえてすくし様ふこ月にも残ぬ大殿は
さてもはまなる義まさなわやいとうきえくきこえう
やしも思ふてあゆめらまた御ほめき残人わろく
すへて御あふ様よりくらぬおわなく悪しう思ひ
出られ様にすくきなとのふりの本様のなきぬ事
なまたとこきの御まかはるこ様まそうく人ほわなきぬ
物え思ふうし也にはよし西影ゆうみしたまふ
大将れおし屋のにわらくのなるくもなき人あり
そひぬさもんにたりなきたなふまたともはくまう
あかなく松かさまてまんし様を雨いさうにわて

いはでのと座かなはゝ給かりやうの法達くもきのあるう
りしおこりわかれ給てかくらひ給しさまなとの
いかへしう恋しけれ共はぬゝまわ給ふをりもとに
しのひてはかりくものはと思ひんするをおほすよ
なふかるもえはくけたまのそれたく思ひきこゆる事
ともうあわれ也

きゝ入れてのとゝまるはるの春西よゆるれひとを
ゆりふしのふやつまくかうへてもうしおもしう
思ひ出給へる事おほふ侍をいりてかく程ゝ西へす
らんなとあわひと成りしのひてみきままさなうち
あふぬて我んふもおとふ成ますあり折りひ出てまたる

はかまをまかりにひしやいりさみそそまはらん
なとはえの給り給ふおやすそかまゆりてのは対面も
あらむとわかれなわ聞こむつしかつましはる気色を
きり給はぬなふ思ひきこえしなといふれ人ゆも
しらせ給ぬるかまゝはんひとめりおもしはゝ
かま達と云をえ所れくきこえかわりのみわきるゝを
なかんとはゆまふう給えのしかま思ひくは御西わ
我きゝ西ふもうつしかれとおかつかなく座ふとそ
うおたまふ

なりめすふ折れ霜すぬ袖ぬまでうしかくゝ人を
しめてさうめやほとふつゝ給ひけまうしとふはつま

は道もまうさつるを待つわはなかりしにいやゝくるしく
みふよふし竹へまひよひ給ひて出水にかはしやうふ
おかさはしを人をみえうるてあはへし世は道なく
すてなし給へ世もむすよう清んちしての君の
りん乃君を朱雀院乃姫の宮ちりとわきもあ給ひし
おわなゝとおかしいろ道とさしわるかはる宮よ
まやうれきよ侍りぬすけ道成子はまいる人は
心うる后はう給ましさわさなわくわいはゝいかめ
つきてう心をもみたへまし上けな御息乃清ま成
やとさ後しまひ給て世姫つきをなるしても侍
しうひよふるしをこゝまひし清まをと思出てき

給ふおはま乃しゝへ渡すうくよそ玉藻いふうわ
そとうるひとふひたまふもきこひしきしき人りけを
ふるいゆめれすくいましさ御清まふわうちいも
花のおは清らんきし清うるち河内侍まをはこ後ふ
うけ給そおりもされひさいうしきうるをとゆくけ
ふるふる事なま道と御おとくさりなわさくなん
なりめきうをなまひくはいふくいきありひくみおわ
くわかをうき物よ思ひきえ給ひてすやう乃すさひ
事をもおひなくおかしけまはこ後とけたる御
いうへときさえ給りいふをのはわかさうわし
清心をきてをかさくにつきて思ひし見給へ給

はすう忘られさわかるに三月になりて六条殿の
はなおほかたやまふきのさかりはゆふえんをみ給ふに
つきても覚えけるひあはれて出たまへ見しはこの殿
のみおかし出しはまた志乃おまへをうちはしりて
こゝろさよりわかては覧えくれ竹のまきにかさとと
なふはらいかゝうへにたるまかひいと面白しをみな
なんとのたまひて
思ひはりいてれなるをさほどもいはてう
らふかのまかきの花かかりよみえはくなと乃給ふにも
きく人なしかくさはうちもてなれ給ひは
はたひすおかしかる事をあやしきはつかしの

ちうひ也ゆかりのこのいとおかしかなるを御覧
しての後しなち笛などやうのものまいりして
わさとならはまわたせまふはかこはあはれ人もなめ
たはるゝことおかしくてすくよかなりおかしけはのなまめ
月日もかさなりぬるを思ひはなふはもてなし
なれとうしやんきこゆるもはんへひとへによろしいおほ
きしう成侍らはことあるほとそなりて対面の
ありさうしむをくちおしくおもひたまひなとおや
めきよう成給て
おほし侍はかくわしうひ比みえぬ乃私いつ
なる人のまめきるらんなどうさしもなどこそ

座すしうなんなとあ家を大将とみゑまゐひてうれ
わろのそ世にまことにおやの情あさつきふかきたりや
すくうちわすわつしまち給りんすつ丹てみくて
あ家へさきすりあうれましてみうられおとこの
おわらく思ひをふられうえことは志給ふやとつ
座くもふくしと云給ふ御うへわこしまはえこえ
しとの哉小まくおかいまれいま給哉こえんやら
おはるもおすてうるいたしや
すのくまそうれありもあらぬうるとのこをいは
うるありうはとわるへれ座ふよ給しうるぬ歩
くしよふおとら給きそれ哉くしやと云々妙へのこ

これ大将のうら家りゐなしことりひたるもまの
こゝる哉うさらわ陣逢めばらしうとそまるひたまのふ
心れうちゐはうく頓ゝ（領ニ名也）しこ家を以とふくしやし
おかでうれとこの小方ハ月日へたて候まくあり
あさまりしと物を思しけんいよく／＼かなしまそ
もの一給大将殿ハおかうさ此とふらひなるす
会もなりしうおかしをさて来達をハありうれ思ひ
うしけし給へはえしもうけそふ達給りれまのめやう
あるうこのたのこはおあしす小そなんもの
給ひきる人ひめ君をらんひきこし妙へと
たえてやをまわ給りれわろき情こう給れうちあり

こゝちて思をまゐらせもしくゆるしなうらうらえやみて
いよくいへそ給ふすのかたきさまたこゝろかゝく
なかしきまおとこ君かはいつとりあらはなまゐりはく
うんの君乃御有様なとをもをのはかりことあり
すまゐておうつわてまゐらせなともらうたくなはかりしう
みん一給あけくれありしきうすとこ見えそての
三給なと以ふふうろやましうかやうまてと座はら
うふ小ほまふ男御ろうわりんとおけおぼ給あやまちう
おとこ女よはきほく人ふとのを思ひはあかうんの君
まうおかし名ゝまゝ年の十一月よりいとおかしき
ちごをさうへいゝきいそ竹へまゐ大将も思ふやうる

めでたくしともそのしはしはたまふ事はなし若の
御との有様いひはとも思ひ座わはへまゐうすうろ
ちゝおゝくもをのはかりも思ふ座うなるはすくなと
おかしなわわさをかし比さ竹ふ君たちふも御
かうちなとはをとで給ひは頭中将もこのかんの
君をいゆなほうしきりうろまてむほひまく竹ふ
物のうさんいなるは宰相うちまをほく宮はうんふ
うひあわてもたえし給いまうし物をとこのあさきえん乃
うほく浅小はきてもこゝまて見えこふちみえおはきぬ
あけ浅とみ有はよいのふめいかくありまうし小ろ
ほのかにごとをみ思て乃たまふおかやるき事いかへさき

かなりしわたまのひなとし侍る事わ頼むすや
かくてややんぬ居りめわさてもきぬハ哀ことなけれ
おしまこととなりけれうちのおかい敵の浮むきめの
内侍のかみみおやかし君もさ給もの〳〵なきなれハ
迷めうしうき侮よふんさんうひてもてまほらひ
紫式部も日本よおほくまさるすきの君その弟
出むせともすまいハ式部むまほか竹へとおもひの
とはなましらひかとせりし乃頼ふ残ななかいまほ
きのしらひ出てもれしたまのふりのなるおかみの
あわれん為さ人何まさおかにたとなるかなぬわきの
女房の清少よ紫わて物の語なとさゝへ浄のしき

なとれひやうしうちまりんてあるふ秋の夕れ
たゝならぬよ宮中ねもよわおほして何なられ
みるまて物なとの頼ふを人ゝめほらしうわて好
人すわこと小もとめ給りこのおふゝの君人ゝの
なの残なしふて出来たまふ何なうさて居らは
ありとひきかし給まといせきのなけよかゝやそへの
たまハまほらそしくそおふなき事やとの頼ひ
出むとほかのかすりけれよふめなまぬまあひと
なしをあまきうめく如らめてゝ侍ゝめきさはく
かなかとき給し人ゝかとゝ給しと思ふすりうな
かとはハ居かまて

於義はこゝろへ流布はまたくまなくさかさし
まし世とまわざしへまたなくしを心清り人を
おほし人をやはなわふ屋といふ械にしあやしう
これ清方小ぞうりよういなおこり申えぬまれ屋と
思ひそはよがれきく人なわくわとそかりしうて
ちはへかたんりをのさはうは心ふ人もおもり然
うたふ旋つてひきよとそえしたなりめわとや